

れないまま、とにかく番号だけが法的認知を受けようとしているのである。韓国では昨年「全民国民」の住民登録番号二回分にあたる番号やそれに付随する個人情報が民間企業から二回にわたりて流出した。市民運動体である「進歩ネット」は政府に番号の変更を要求したが拒絶されている。この事件は私の韓国在住の友人に聞いてもほとんど話題にすらなっていないようだ。番号は空気のような存在となり仮に汚染されたとしてもなくてはならない存在になってしまった。韓国を日本の近未来として宣伝する輩が推進論者には多いが、見方を変えればデイストピアであることに全く気付いていない。

そしてまた冒頭の答弁に戻る。番号はツールやインフラではないのだ。もし価値中立的な存在だとしたら、社会のあり方によつてこれだけ利用方法にバラツキが出てくるわけがない。ドイツではナチスの国民管理に

号制度は相即的な関係にあるのでツールやインフラとして捉えられるのは間違いなのである。私は最近共通的な番号制度と核工エネルギーはどちらも人間が制御できるようになった。共通番号制度は権力者の都合のいいように増殖していくものである。番号制度そのものが自己増殖を果たし、いつの日いか人間が制御できない超管理社会を創出するのではないか。だから共通番号制度は封印されなくてはならないときに入を死に追いやる裁判所の「お上意識」

裁判所職員?の差別発言 ブログ「裁判所職員のぶつちやけ時事放談」

共同親権運動ネットワーク・宗像充

先日、「裁判所職員のぶつちやけ時事放談」というブログで、家裁利用者を「キチガイ」と呼んでいるというメールが寄せられた。ブログの書き込みは2月

対する深い反省から共通番号の利用はない。社会のあり方と番号制度は相即的な関係にあるのでツールやインフラとして捉えられるのは間違いなのである。私は最近共通的な番号制度と核工エネルギーはどちらも人間が制御できるようになった。共通番号制度は権力者の都合のいいように増殖していくものである。番号制度そのものが自己増殖を果たし、いつの日いか人間が制御できない超管理社会を創出するのではないか。だから共通番号制度は封印されなくてはならないときに入を死に追いやる裁判所の「お上意識」

のである。

当初対決法案ではないと考えられてきた本法案に対して自民党は今のところ反対しているようだ。マイナンバーという名称に対する嫌悪と番号ICカードが強制配布でないことがその根拠であるらしい。全く理由は異なるが強制勢力の存在は頼もし。本誌が刊行されるまでに成り立してしまつていたなどといふことのないよう3月6日は院内集会、そして3月21日には市民集会を開催し、法案を廃案に追い込むよう闘いを拡大していくことをしたい。

甲野太郎」名のブログは、実際に裁判所の一職員が勝手なことをしゃべるブログです。「甲野太郎」名のブログは、実際には、裁判所の職員が作ったかどうかは不明だ。とはいえて、裁判所には、裁判所の職員間の家裁評価や人事上の扱いなど、裁判所職員にしか知り得ないものも具体的に書かれている。そう思われるに十分な内容だ。

ほくたちは、主に離婚をきっかけに子どもに会うのが難しくなった親たちで会を作つている。子どもと会うためには、家庭裁判所に調停を申し立てるこ

間ほどで、守られる保障はない。子どもに会いたいと相談に来た人にはこういう。「ほくたちハエッすよ、ハエ」。期待して家裁に行くと、バシッと打ち落とされる。

家裁には約束を履行させるための強制力が弱く、結果、「実効支配」が「母性優先」よりも優先ルールとなっている。子ども

とが公式な手段だ。しかし、子どもと暮らす側の親がかたくなると、子どもとは引き離される。こういった現象は片親疎外として日本でも知られるようになってきた。離婚の渦中、さらに子どもと引き離された当事者の心理的な負担は相当なものだ。実際、ぼくが知っているだけでこの四年、「敷地の外」で

子どもに会えない親、三人が自殺している。それ以外にもフランス大使館は、日本人との結婚で、三人のフランス人の別居親の自殺を発表している。家裁に行つても、子どもと会うとう取り決めができる確率は約半分。月に一回以上の取り決めができるのは、さらにそのうちの半分となつていて。それも二時

間ほどで、守られる保障はない。子どもに会いたいと相談に来た人にはこういう。「ほくたちハエッすよ、ハエ」。期待して家裁に行くと、バシッと打ち落とされる。

家裁には約束を履行させるための強制力が弱く、結果、「実効支配」が「母性優先」よりも優先ルールとなつていて。子ども

もを持つていない親には、男女かわらず調停委員や裁判官は子どもを諦めさせる。母親は、「あなたまだ若いんでしょ、再婚して子ども生んだら」と言われ、父親は、「子どもが小さいうちには女が育てるのが当たり前」と言われたりする。昨年民法に「面会及びその他の交流」という文言が明文化された。改